

地質学雑誌投稿編集出版規則

地質学雑誌への投稿およびその編集・出版については、本規則および別に定める細則による。

A. 投稿原稿の要件

1. 本誌への投稿原稿で著者として記載されるためには、次の①～④の要件をすべて満たすことを要する。
 - ① 投稿原稿の研究において企画・構想、または調査・実験・観測に本質的な貢献をしている、または理論的解釈やモデル構築などで実質的貢献をしていること。
 - ② 投稿原稿の草稿を執筆、または投稿原稿の重要箇所意見を表明してその完成に寄与していること。
 - ③ 内容および結論を著者として承認していること。
 - ④ 投稿原稿の内容に関する責任はすべて著者にあるものとし、D. による審査、地質学雑誌への掲載で一般社団法人日本地質学会には責任が生じないことを著者として認めていること。
2. 投稿原稿は、次の各号をいずれも満たす必要がある。
 - 1) C. に定める地質学雑誌の内容を満たし、H. またはI. の作成方法に則ったものであること。
 - 2) 投稿原稿の内容が、国内外の学術誌・商業誌・紀要を含む機関誌・書籍・国際会議の口頭発表論文 (extended abstract)・プレプリントサーバー等に掲載済みでないこと。またそれらに投稿中でもなく、掲載予定でもないこと (以下「重複投稿の禁止」という)。または、次の要件を満たすこと。
 - a. 投稿原稿が既に学位論文としてリポジトリに登録されている場合は、その限度でのみ、複製権、公衆送信権及び送信可能化権を所属大学に対して非独占的利用許諾したに止まり、著作者 (または共著者) に著作権が帰属していること (地質学会に投稿原稿の著作権譲渡が可能であること)。
 - b. 投稿原稿の内容の一部が既発表ではあるが、より深く調査、解析または実験して、新たな知見等をまとめたものである場合、既発表論文を文献リストに含め、学会の講演要旨集に掲載されている内容のものはその旨を原稿中に記し、それとの差違を明記する。

B. 投稿原稿の提出と受付処理および保管

1. 投稿原稿の筆頭著者は会員に限る。ただし、日本地質学雑誌編集委員会 (以下「編集委員会」という) からの依頼による場合はこの限りではない。
2. 投稿原稿は、日本語もしくは英語で作成し、以下の定めに従い電子投稿・査読システムを通じて編集委員会に提出する (年会の際の巡検案内書については巡検案内書編集委員会宛とする)。すなわち、下記の URL 画面の指示にしたがい必要事項を入力したうえで、指定された形式の電子ファイル (本文、図表) をアップロードする。また、L. に定める保証書に必要な署名をして提出する。

<http://mc.manuscriptcentral.com/geosoc>
3. 編集委員会は、署名された保証書が添付されている投稿原稿について受領したときは、その受付年月日を記録し、原稿を保

管する (以下「受付処理」という)。ただし、投稿原稿が本規則に明らかに反している場合には、受付処理をせず、理由を付して原稿を著者に返却することができる。

4. 編集委員会は、投稿原稿が、討論をおもな内容としていた場合、当該投稿原稿を討論対象の論文等の著者に送付し、その回答・反論の原稿を求めるよう努める。
5. 編集委員会は、会員または非会員に依頼して原稿を求めることができる。

C. 地質学雑誌の内容

1. 広い意味の地質学に関連する以下の論文とする。
 - a. 論説 (Article) : オリジナルな研究論文で、内容の主要な部分が学術論文としてほかに発表されていないものまたは。
 - b. 総説 (Review) : ある分野の論文や学説などを総括、解説、あるいは紹介したもの、および地学上の顕著な現象 (噴火・地震など)、重要な地域・対象物、研究上の技術・方法等に関する紹介。
 - c. ノート (Note) : 技術・手法・術語・地質学史などについての報告または紹介、および編集委員会からの依頼による特定のテーマ・分野についての啓蒙的な解説。
 - d. 報告 (Report) : 卒論・修論等に掲載されたオリジナルデータあるいは業務などの中で得られたデータの報告。議論は含まない。
 - e. 講座 (Lecture) : 特定のテーマについて基礎から先端的事項まで解説することを目的に連載する教育的記事。本文は日本語とする。講座に関する細則にしたがうこと。
 - f. 口絵 (Pictorial) : 雑誌の巻頭を飾る顕著な地質現象、露頭、地形、岩石、鉱物、地質環境などの未公表のカラー写真。短い解説を付す。
 - g. 討論 (Discussion) : 上記の a. ~ f. に対する学術的な討論。
2. 著者の申し出があり、かつ理事会において別に定める地質学雑誌オープンファイル掲載細則に基づいて編集委員会が適当と判断する場合、C. 1. の原稿の一部を、その掲載と同時に、地質学雑誌オープンファイルとして日本地質学会ホームページに掲載することができる。
3. 1. および 2. の他、地質学雑誌補遺 (巡検案内書) および編集委員会が依頼または適当と認めた原稿。

D. 投稿原稿の審査と採否

1. 編集委員会は受付処理をした投稿原稿を審査し、掲載の可・不可を決める。
2. 編集委員会は、必要に応じて会員または非会員に投稿原稿の査読を依頼することができる。ただし、この場合も最終的な審査は編集委員会の責任において行うものとする。
3. 編集委員会は投稿原稿について、著者に修正を求めることがある。修正を求めた投稿原稿が 90 日以上経過した後に編集委

員会に提出されたときは新規の投稿としてとり扱う。

4. 編集委員会が掲載可と認めたとき（以下「受理」という）は、編集委員会は受理年月日を記録し、著者に通知する。
5. 著者は、編集委員会から 4. の受理の通知があった場合には、L に定める著作権譲渡同意書に必要な署名をし、最終の投稿原稿の出力見本（プリント原稿）とともに編集委員会に郵送する。その際、文章部分の投稿原稿は可能な限り電子媒体でも提出することとする。また、プリント原稿には添え字やイタリック指定などの校正記号を記入すること。ただし、論文のタイトルや文献リストなど、本文とは文字種が異なっている場合、定形的な部分については指定しなくてよい。
6. 出版後、著者より提出された最終の投稿原稿（以下「受理原稿」という）は原則として返却しない。
7. 編集委員会が掲載不可と認めたときは（以下「不受理」という）、その理由を明らかにした書面とともに著者に原稿を返却する。
8. 編集委員会が不受理とした投稿原稿について、その理由を著者が了解しないときは、著者は会長に申し立てをすることができる。

E. 校 正

1. 受理原稿の初校正は、原則として著者が行う（再校正以後は編集委員会が行う。）。
2. 発行までの時間の制約が厳しいときは、著者による校正を略し、編集委員会が校正を行う。
3. 校正のときには、編集委員会が必要と認めた場合を除き、著者は受理原稿と著しく異なるように書き換えを行うことはできない。許可を得て書き換えを行った結果、印刷費の増加分が生じた場合には、これを著者が負担することとする。

F. 論 文 の 掲 載

1. 受理原稿の掲載順は原則として B. 4. の受付処理の順とする。ただし、次の条件を考慮して順序を変更することがある。
 - a. 討論はその回答とあわせて同時に掲載するように努める。
 - b. 特別な号または特別な論文などについては、その趣旨に応じて掲載の順序を定める。
 - c. 講座については、連載の 1 回分を 1 つの号に掲載する。ただし、編集委員会が認めれば、第 1 回と第 2 回に限り、同じ号に掲載することができる。

G. 別 刷

1. 著者が、会費の割引が適用されている正会員の場合には、出版印刷費用等に関する細則で定める一定部数の別刷を無料で贈呈する。

H. 日本語の原稿（投稿原稿および受理原稿）の作成方法

1. 原稿の構成は、以下のとおりとする。
 - 1) 原稿にはすべて英語の表題と著者名のローマ字書きを添える。
 - 2) 論説および総説には日本語と英語の要旨（abstract）をつける。他の言語を認めない。報告・ノートには英語の要旨

をつける。講座には要旨をつけない。要旨に用いる言語は、日本語と英語のみとする。日本語要旨の長さは 400 字以内とし、英語要旨の長さは、論説および総説は原則 300 語以内、報告・ノートは原則 200 語以内とする。英語要旨の原稿の書き方は、I. に従う。日本語要旨および英語要旨の原稿はそれぞれ本文と別のページにする。

- 3) 原稿の第 1 ページに、著者の所属する機関または連絡先ならびにその英訳を書く。
- 4) 口絵以外の原稿には、柱（刷り上がりページ上部欄外の見出し）の原稿をつける。ただし、著者名および論文表題はそれぞれ 30 字以内とする。
- 5) 討論および口絵以外の原稿には、ページを独立させて英語キーワードまたはキーフレーズの原稿をつける。

例) Keywords: Neogene, Sambagawa, active fault, sedimentary environment, paleontology, K-Ar dating

- 6) 著者プロフィールを論文の末尾に付すことができる。ただし、口絵には付けない。リレー形式の講座の場合、新たな著者が執筆する回に、その著者についてのみ付すことができる。その他の講座の場合、第 1 回にのみ付けることができる。著者プロフィール欄に記す著者は最大 5 名までとし、その各著者につき最大 200 文字とする（スペースを含めない文字数）。この欄には、それぞれの氏名・現職・略歴・研究内容・E-mail アドレス・URL を記すことができる。また、執筆者の顔写真（スナップ可）を縦 2.5 cm×横 2 cm で掲載することができる。余白が少ないときは、代表者のみの写真に限る。写真はモノクロで印刷される。

例)

地質花子 ○○大学大学院○○学研究科○○学専攻助教。05 年 ○○大学○○学部卒、10 年 ○○大学大学院○○学研究科博士後期課程修了（○○学博士）、10 年 学術振興会特別研究員、12 年 ○○研究所研究員、14 年から現職。研究内容：○○地域の層序および地学教育、特に○○による○○の解明。E-mail：xxx@xxx.xxx.ac.jp, URL：www.xxx.ac.jp/xxx/xxx.html.

地質太郎 ○○株式会社○○部。98 年 ○○大学○○学部卒、00 年 ○○大学大学院○○学院博士前期課程修了、00 年から現職。研究内容：○○化石による古環境変動の解明。E-mail：xxx@xxx.xxx.xx.jp, URL：www.xxx.co.jp/xxx/xxx.html.

地質次郎 ○○市役所○○部。00 年 ○○大学卒業。

- 7) 当該論文でどのような貢献をしたか著者全員について、文献リストにつづけて簡潔に記述すること。
 - 8) 著者は、A. 2. 2) 第 2 文に該当する場合、原稿の冒頭または末尾のいずれかに、リポジトリ登録済み（または登録予定）である旨及び当該リポジトリ名を記載する。
2. 原稿の文章および文体は、以下のとおりとする。
 - 1) 文体はひらがなと漢字による口語常態（である体）とし、現代かなづかいを用いる。
 - 2) 漢字は常用漢字とする。ただし、固有名詞や学界で広く用いられている慣用の術語はこのかぎりでない。

- 3) 句読点は、コンマ (,) とピリオド (.) を用いる。
 - 4) 本文中 (謝辞を除く) の人名には敬称をつけない。
 - 5) 数量を表す数字はアラビア数字とする。
 - 6) 単位は原則としてメートル法により、ローマ字による省略形を用いる。
 - 7) 文中に英語をはさむことはなるべくさける。ただし、生物の学名、適当な訳語のない術語、固有名詞など、および図表を指し示す際に必要であればこのかぎりでない。
 - 8) 文中の英語は、原則として小文字とする。
 - 9) 固有名詞で読み誤るおそれのあるものにはふりがなをふる。
3. 原稿の書式は、以下のとおりとする。
- 1) 原則として、原稿は A4 判書式に 1 行 40 字×30 行で作成し、周囲に 3 cm 程度余白を十分にとる。原稿にはページ番号をつける。地質学雑誌のホームページに置かれた原稿のテンプレートをできるかぎり使用すること。
 - 2) 句読点、引用符、その他の記号もすべて 1 字とする。
 - 3) 原稿の右側欄外に図・表を入れる位置を示す。
4. 原稿の種別にかかわらず、文献を引用したときは、引用文献の書式に関する細則に従ってそのリストをつける。ただし、未公表の文献は引用できない。講座の場合は、それぞれの回で引用した文献のリストをつける。引用文献の書き方は、以下のとおりとする。
- 1) 文中の文献の引用は、原則としては以下にならう。ただし、著者名のまぎらわしいものは、姓名を完記する。
例)
小川 (1899) は、これを中央日本横溝帯とよんだ。
中央日本横溝帯 (小川, 1899) とよばれる。
これらの研究 (原田, 1888; 小川, 1899; 小沢, 1923a, b) は、…別の研究 (小川, 1899; 石井八萬次郎, 1899; 石井万次郎, 1906; 小沢, 1923, 1924)。
 - 2) 引用文献は文献として論文末に一括し、著者名のアルファベット順、同一著者の論文は、単独論文を年代順に、続けて第 2 著者のアルファベット順とし、同一の組み合わせの著者の場合は常に年代順とする。姓名は完記する。著者が 7 名を超える文献は、最初の 6 名を列挙し、省略記号 (日本語部分は……、英語部分は…) を付したあと、最後尾の著者名を記す。
例)
加瀬善洋・仁科健二・川上源太郎・林 圭一・高清水康博・廣瀬 亘……石丸 聡 (Kase, Y., Nishina, K., Kawakami, G., Hayashi, K., Takashimizu, Y., Hirose, W., … Ishimaru, S.), 2016, 北海道南西部奥尻島で発見された津波堆積物 (Tsunami deposits recognized in Okushiri Island, south-western Hokkaido, Japan). 地質雑 (Jour. Geol. Soc. Japan), 122, 587-602.
 - 3) 文献がローマ字を使う主要な西欧語の場合は、英語文献と同じ扱いとする。ローマ字を使う言語でも大多数の読者にとって馴染みのない言語の場合は、タイトルと雑誌名の英訳を併記し、末尾に言語名を付す。ローマ字を使わない言語の場合は、著者名・タイトル・雑誌名を英語で示し、元の言語ではそれらを示さない。また、末尾に言語名を付す。
 - 4) 学術雑誌等の電子出版態を引用する際には、特別の引用表記が指定されている場合を除いて、通常の印刷出版物と同様の表記で引用文献リストに掲げる。なお、印刷出版物と電子出版物が同時に出版されている場合には、原則として印刷出版物を優先して引用することとする。
 - 5) ウェブページを引用する場合には、その参照対象が当該原稿の出版以降十分な期間にわたって存在し、かつ掲載内容が固定的であることを必要とする。ウェブページの URL は、本文中で引用する順に、引用文献リストに続いて次のように列挙する。
[URL1] 日本地質学会 (The Geological Society of Japan), 地質学雑誌 (Journal of the Geological Society of Japan), <http://www.geosociety.jp/publication/content0002.html>.
[URL2] 地質花子 (Chishitsu, H.), 日本列島の形成 (The Formation of Japanese Islands), <http://www.xxx.xx.html>.
[URL3] Jones, A. B., Geology of XXX, <http://www.yyy.xx.html>.
本文中で参照するときには、このリストに掲げた記号を使って [URL1] のように表記する。
5. 図・表を以下のように定める。
- 1) 口絵以外の投稿原稿の図・写真・表の類を次の 3 種類に分け、それぞれ番号をつける。
a. 図 (Fig.): 本文中または折り込んで入れる図および写真。
b. 表 (Table): 本文中または折り込んで入れる記号・文字・罫線のみからなるもの。
 - 2) 図・表は別紙とし、1 枚ごとに、本体からなるべくはなして、著者名、図・表の番号を略記する。
 - 3) 図の内容の大きさを示すには、何分の 1 としないで、縮尺 (スケール) を図中に書く。
 - 4) 図・表ともに、印刷したときの品質が鮮明になるように、十分な精度を持った PDF ファイル、あるいはプリントアウトを提出する。印刷に耐えられない場合、編集部より再提出を求めることがある。
 - 5) 手描きの図を使用する場合は、白紙または淡青色印刷の方眼紙に、墨または黒インキで、明瞭に、かつ体裁よく書くこと。縮図してもよいように、文字・記号・線等の、大きさと調和に留意すること。
 - 6) 口絵・図・表中の文字およびこれらに付帯する説明文 (キャプション) は英語とする。説明文は別のページに書き、日本語の説明文を付加してもよい。英語以外の外国語の使用は、固有名詞以外は認めない。図中の地名などの固有名詞には、必要に応じて日本語を付す。
6. 数式の書式は、理事会において別に定める数式の書き方に関する細則に従う。
1. 英語の原稿 (投稿原稿および受理原稿) の作成方法
1. 原稿には英語で記述することができる。ただし、討論および討論に対する回答などは、当該原稿と同じ言語で作成する。

2. 原稿は語学的に難点のないものであることを必要とし、著者の責任において完成する。
3. 原稿で、日本語および漢字を用いる言語による人名・地名・地層名などをローマ字書きにするときは、それを文末に一括し、アルファベット順に表示し、その原名（漢字）を示す。ただし、周知のものは省略してもよい。
4. 柱の原稿は語間のあきも1字と数え、40字以内とする。
5. 討論および口絵以外の原稿には、英語による要旨をつけ、論説・総説には、さらに日本語による要旨をつける。英語要旨・日本語要旨とも、その長さは、論説および総説は原則300語以内、ノート・報告は原則200語以内とする。
6. 討論および口絵以外の原稿には英語キーワードまたはキーワードをつける。原稿の書き方は日本語原稿の規則に準ずる。著者プロフィール欄は、可能なら日本語で書くこと。その書式は日本語原稿の場合と同様とする。
7. 原稿は、A4判書式にダブルスペースで作成し、周囲の余白を3cm程度とる。
8. 原稿に用いた英語以外の語で書かれた文献を引用する場合には、その文献の末尾の語の右肩に*などを付し、文献欄の最後に*などの意味を説明する。
例)*: in Japanese with English abstract
9. 上に定めた事項以外の事項は、H.に従う。

J. 印刷原稿

1. 印刷原稿のページ数（著者プロフィールを含む）を原則として次のとおりとする。ただし、以下のa.～e.に従う。

論説：	刷り上がり	16ページ
総説：	”	16ページ
ノート：	”	6ページ
報告：	”	6ページ
講座：	”	16ページ（1回分）
討論：	”	4ページ
口絵：	”	2ページ

 - a. 論説・総説・ノート・報告については、編集委員会が適当と認めた場合、原稿の長さを超過することができる。ただし、規定のページ数を超過する分については、印刷費の一部を著者負担とする。
 - b. 討論は、原則として、1論文に対し、1名の投稿者は1度かぎりとする。
 - c. 口絵の説明文は写真ごとにつけても、一括してもよい。
 - d. 折り込みの図・表は、折りたたんだときに重なり合った紙の枚数の2倍をもってページ数と見なす。
 - e. 口絵は、図と写真あわせて5点以内、文献は3件以内とする。キャプションはそれぞれ100語以内、全体の説明文は

400字以内、英語の場合は300語以内とする。

2. 図原稿を印字された原図で提出する場合には、折り込みの図を除き新聞紙1ページ大（40cm×50cm）を超えないものとする。表（Table）原稿は電子入稿ないし表原稿を写真製版するものとし、組版はしない。したがって、フォントや字形の選択を含め、読みやすい表を著者が用意する必要がある。
3. 超過ページに対する著者負担額、無料で配布される別刷り数、ならびに有料分の別刷り費用については理事会において別に定める出版印刷費用等に関する細則によることとし、この細則は別途会計年度ごとに定めることができることとする。
4. 著者は、超過ページに対する著者負担額が確定し、一般社団法人日本地質学会会長の請求があったときは、速やかに支払う。
5. 巡検案内書の刷り上がり制限ページに関しては、編集委員会において別途定める。

K. 著作権

1. 地質学雑誌に掲載された論文の著作権（著作財産権, Copyright）は、D. 4.により、日本地質学会に帰属する。
2. 地質学雑誌に掲載された論文について、日本地質学会ならびに日本地質学会より正当に権利を取得した第三および当該第三者から権利を承継した者に対し、著者は著作人格権（公表権、氏名表示権、同一性保持権）を行使せず、これらの者から、第三者に対する著作人格権の行使を要請された場合、それが正当な権利行使である場合に限り、これに応じるものとする。
3. 日本地質学会が著作権を保有する論文（著作物）を利用するにあたっては、別途定める著作物利用規定に従う。

L. 保証書及び著作権譲渡同意書

1. 保証書は、別紙書式1とする。
2. 著作権譲渡同意書は、別紙書式2とする。

附則 ・本規則の変更は、理事会の承認を得る。

・本規則は、2011年6月11日から施行する

- ・2012年6月9日一部改正
- ・2012年12月1日一部改正
- ・2013年9月13日一部改正
- ・2013年12月7日一部改正
- ・2014年4月5日一部改正
- ・2014年9月12日一部改正
- ・2014年12月6日一部改正
- ・2016年4月2日一部改正
- ・2016年12月3日一部改正
- ・2017年9月15日一部改正

細則 1

地質学雑誌オープンファイル掲載細則

1. 地質学雑誌オープンファイル（以下、オープンファイルとする）は、日本地質学会がその著作権を保有する著作物の一部をなす電子ファイルであり、日本地質学会ホームページにアクセスできるすべての読者に対して無償で配布されるものとする。したがって、主体をなす地質学雑誌に掲載された主著作物と同一の著作者、表題、発表年、掲載雑誌巻号とともに、別途指定されたオープンファイル番号と付図（Fig.）、付表（Table）、その他の資料（Supplementary File）番号等により表示される。
2. 内容が以下の条件のすべてを満たすと編集委員会が判断するものについて、日本地質学会は、これをオープンファイルとしてホームページ上の定められた場所に掲載することができる。
 - a. 日本地質学会員を含むインターネットからのアクセスに対し公開することに一定の価値・意義が認められること
 - b. ある程度以上まとまった量からなること
 - c. 調査・実験・解析・計算等の一次データや事実の記載等、著者等の判断や議論の含まれないものであること
 - d. 掲載予定論文の成立に不可欠ないし非常に重要な補助的情報であること
 - e. 事前・同時に他所で公表して引用することが困難な内容と認められること
3. オープンファイルとする電子ファイルは、論文1つにつき10ファイルまでとし、1ファイルの大きさは50メガバイトまで

とする。また、著者が提出するファイルの形式は、図表の場合はPDF（3D PDFを含む）、TIFF、JPEG等、動画の場合はMOV、MP4等、地理空間情報の場合はKML、KMZ等とする。このほかテキストファイルも受け付ける。

4. 著者の提出するデータは、これが一部をなす投稿原稿の編集の際にオープンファイルとして通常の投稿原稿中の図・表原稿等と同様の形態で提出し、編集委員会は当該投稿原稿の受理をもってオープンファイルでの掲載の可・不可を決める。
5. 編集委員会は、ホームページに掲載されたオープンファイルについて、著者からの申し出による場合を除いて、その内容の改編は一切行わないものとする。ただし、内容の改編を伴わない表示形式等の変更と掲載中止の判断は編集委員会が自由に行えるものとする。

附則 ・本規則の変更は、理事会の承認を得る。

・本細則は、2009年6月1日から施行する。（「地質学雑誌オープンファイル掲載」を2009年6月1日一部改正）

2013年9月13日一部改正

2014年4月15日一部改正

2014年9月12日一部改正

2017年12月2日一部改正

細則 2

地質学雑誌特集号刊行までの手順に関する細則

1. 地質学雑誌の特集号の企画は、特集号の代表世話人が「特集号申込書」^{注1}を編集委員会に提出（電子メールによる）することで、随時受け付けるものとする。申込書にもとづいて、同委員会は申し込みの受諾の可否を決定し、代表世話人に連絡する。受諾の場合、代表世話人もしくは論文著者は地質学雑誌投稿編集出版規則に従って、構成論文の原稿を電子投稿・査読システムにより原稿を投稿する。受諾通知から3ヶ月以内にすべての構成論文が投稿されない場合、代表世話人は欠けた原稿を企画から除くか、またはその原稿の完成を待つかを判断し、「特集号申込書」を再提出する。
2. 特集号世話人は客員編集委員となり、編集を担当することができる。その任期は当該特集号が刊行されるまでとする。
3. 編集委員会では、すべての原稿の投稿が確認された段階で、担当の編集幹事や査読者等を決める。個々の論文の査読は、著者の会員・非会員を問わず、原則として通常の論文の場合と同じ扱いで行う。査読者には、論文の原稿とともに、「特集号申込書」を添付し、特集号の中の論文であることや、全体の構成について査読者にわかるようにする。
4. 掲載不可と判断された論文については、そのことを代表世話人に連絡し、特集号から外してもらう。掲載不可と判断された論文が多数ある場合は、別の特集号として縮小再編するか、あるいは特集号を止め、個別論文とするかなどを代表世話人に再検討してもらう。
5. 特集号の掲載時期は編集委員会で決めるが、原則として最も受理の遅い論文の受理日を基準とする。
6. 年間総ページ数や一般投稿論文へのしわ寄せを防ぐために、1特集号あたりの総ページ数の上限を原則80ページ以内とし、

最大でも100ページを越えないものとする。

7. 希望する場合には、特集号に関連した口絵をつけることができる。原則2ページで、4ページを越えないものとする。
8. 編集委員会独自の判断で、特集号を企画・立案する場合もある。
9. なお上記手順については、必要に応じて修正を行うものとする。

注1：「特集号申込書」には最低限以下の項目について記述するものとする。

- 1) 特集号タイトル
- 2) 特集号世話人氏名
- 3) 代表世話人と連絡先（所属先、電話、FAX、e-mail等）
- 4) 本特集の趣旨（意義・目的）・経緯
- 5) 特集号の構成（個々の論文の著者・タイトル・和文要旨・見込み印刷ページ数および著者の資格（会員・非会員））
- 6) 印刷ページ数（見込み、原則として80ページ以内、最大でも100ページを越えない）
- 7) 口絵の有無（有る場合はそのタイトル、著者とページ数、原則2ページ、最大4ページ）
- 8) その他（世話人から編集委員会へのコメント）

附則 ・本規則の変更は、理事会の承認を得る。

・本細則は、2009年6月1日から施行する。

2011年6月1日一部改訂

2012年12月1日一部改訂

2014年9月12日一部改正

2015年9月10日一部改正

2016年12月3日一部改正

細則 3

出版印刷費用等に関する細則

1. 地質学雑誌における出版印刷費用を以下に定め、第115巻第9号掲載分より適用する。
2. 超過ページに対する著者負担は、1ページにつき16,000円とする。
3. カラーページの著者負担は、1ページ90,000円、2ページ目以降からは30,000円/ページとする（見開き等にかかわらず）。
4. 別刷りは、有料とする。ただし、会費の割引が適用されてい

る正会員には、50部を無料とする。別刷りの増刷は50部単位とし、表紙の要、不要のいずれかを指定する。表紙要の場合は、無料分についても表紙要とする。

5. 別刷り料金は別紙、地質学雑誌別刷料金表の通りとする。

附則 ・本規則の変更は、理事会の承認を得る。

・本細則は、2009年6月1日から施行する。

2011年6月1日一部改正

2014年9月12日一部改正

地質学雑誌別刷料金表

単位/円

部数/紙枚数	1枚	2枚	3枚	4枚	5枚	6枚	7枚	8枚	9枚	10枚	表紙
	2ページ	4ページ	6ページ	8ページ	10ページ	12ページ	14ページ	16ページ	18ページ	20ページ	
50部	3,750	4,800	5,850	6,900	7,950	9,000	10,050	11,100	12,150	13,200	2,750
100部	5,100	5,700	7,200	8,600	10,100	11,500	12,900	14,200	15,600	16,700	3,550
	2,050	2,850	3,600	4,300	5,050	5,750	6,450	7,100	7,800	8,350	
150部	5,550	7,500	9,600	11,475	13,500	15,300	17,100	18,825	20,475	21,900	4,400
	3,700	5,000	6,400	7,650	9,000	10,200	11,400	12,250	13,650	14,600	
200部	6,600	9,000	11,400	13,600	15,800	18,000	19,800	22,000	23,600	25,200	5,500
	4,950	6,750	8,550	10,200	11,850	13,500	14,850	16,500	17,700	18,900	
250部	7,500	10,000	12,500	15,000	17,375	19,625	22,000	24,250	26,375	28,500	6,050
	6,000	8,000	10,000	12,000	13,900	15,700	17,600	19,400	21,100	22,800	
300部	8,400	11,040	13,680	16,320	18,960	21,600	24,300	26,760	29,280	32,160	6,600
	7,000	9,200	11,400	13,600	15,800	18,000	20,250	22,300	24,400	26,800	

1 料金表の上段は無料部数なし、下段は無料部数 50 部の場合。

2 無料配付 (50 部) は、会費の割引が適用されている正会員を対象とする。

3 カラー印刷が含まれる場合は、上記料金に割増料として著者負担部数 1 部に付き 30 円を加算する。

4 原則として、別刷り印刷部数は 300 部を上限とする。

5 送料は実費を著者が負担する。

*なお、現在、超過ページ・カラーページの負担金は次のように定める。

1) 印刷ページが制限ページ数を超えた場合、負担金は 1 ページあたり ¥16,000 とする。

2) 論文中でカラー印刷をした場合、負担金は 1 ページ ¥90,000、2 ページ目以降 ¥30,000/ ページとする。

細則 4

引用文献の書式に関する細則

地質学雑誌の引用文献は、下記に示した文献例の書式を参考にして記述する。和文は著者名・タイトル・誌名の英訳を添える。英語タイトルのない文献は、英訳してアスタリスクを付け、文献リストの末尾に「*English translation from the original written in Japanese」と記述する。日本語以外の非ローマ字言語では、英語ないしローマ字表記で記述する。本文が日本語でも英語でもない場合、末尾に (in Russian) のように言語名を記す。下の例の末尾の [] は注釈。

1. 学術誌

Banno, S., 1958, Notes on rock-forming minerals(1), magnesioarfvedsonite from the Bessi District. *Jour. Geol. Soc. Japan.*, **64**, 386–387.

Bolzan, M. J. A., Rosa, R. R. and Sahai, Y., 2009, Multifractal analysis of low-latitude geomagnetic fluctuations. *Ann. Geophys.*, **27**, 569–576. [Ann. はAnnales, Annali, Annalen の略. Annu. はAnnual の略.]

秩父盆地地体研究グループ(Chichibu Basin Collaborative Research Group), 1999, 秩父盆地に分布する新第三系最下部の層序と構造(Stratigraphy and geological structure of the lowest Neogene in the Chichibu Basin of the Kanto Mountains, central Japan). 地球科学(*Earth Sci. (Chikyu Kagaku)*),

53, 175–189.

Choi, J.-H., Kim, Y.-S. and Kim, C.-B., 2013, Geometric and kinematic characteristics of the folded boudin structures. *Jour. Geol. Soc. Korea*, **49**, 553–563 (in Korean). [本文は非ローマ字言語だが英語タイトルが当該論文に示されている場合.]

Franzke, H. J., Zeh, A. and Meier, S., 2007, Die Metamorph-magmatische und strukturelle Entwicklung des Kyffhäuser Kristallins/Mitteldeutsche Kristallinzone – Vergleich mit der Wippra-Zone und dem Eckergneis/Harz. *Z. Geol. Wiss.*, **35**, 27–61 (in German). [非英語だがローマ字を使う言語.]

Goode, J. K. and Burbank, D. W., 2011, Kinematic implications of consequent channels on growing folds. *Jour. Geophys. Res.*, **116**, B04407, doi: 10.1029/2010JB007617. [AGU の雑誌に掲載された論文で、ページ番号では特定できないもの.]

Goode, P. R., Qiu, J., Yurchyshyn, V., Hickey, J., Chu, M.-C., Kolbe, E., Brown, C. T. and Koonin, S. E., 2001, Earthshine observations of the Earth's reflectance. *Geophys. Res. Lett.* **28**, 1671–1674. [AGU の雑誌に掲載された論文で、ページ番号で特定できるもの.]

Gzovskii, M. V., 1954, Tectonicheskie polya napriajenii. *Izvs-*

- tia AN SSSR, ser. Geofiz., 3, 390–410 (in Russian). [ロシア語タイトルをローマ字表記. タイトルを英訳してもよい (Il'yushin (1954) を参照).]
- Il'yushin, A. A., 1954, On the relation between stresses and small strains in continuum mechanics. *Prikl. Mat. Mekh.*, **18**, 641–666 (in Russian). [当該文献に英語タイトルが示されていない場合は, もとのタイトルをローマ字表記するか (Gzovskii (1954) を参照), または, 英語文献で引用される際に使われる英訳タイトルを記述する.]
- 北村 信・小高民夫・早坂祥三 (Kitamura, N., Kotaka, T. and Hayasaka, S.), 1956, 岩手県南西部の地質構造発達史について (The structural history of the northern part of Iwate Prefecture). 東北大理学部地質古生物邦文報 (*Contrib. Inst. Geol. Paleontol., Tohoku Univ.*), **47**, 1–20. [紀要論文の例.]
- Lin, G., 1990, Outline of intrusive rocks in Guandong Province. *Guandong Geol.*, **5**, 1–32 (in Chinese). [本文は中国語だが, 英語タイトルが示されている場合.]
- 小川琢治 (Ogawa, T.), 1896, 中央亜細亜の層位に就いて (On the stratigraphy of central Asia)*. 地質雑 (*Jour. Geol. Soc. Japan.*), **3**, 276–278. [当該論文に英語タイトルが示されていない場合.]
- Poignant, A., 1964, Esquisse stratigraphique de Jurassique supérieur et du Crétacé inférieur du chaînon du Mail-Arrouy (Basses-Pyrénées). *Bull. Soc. Geol. Fr.*, **6**, 171–174 (in French). [当該論文に英語タイトルが示されていないが, 本文がローマ字の場合.]
- Takeshita, T., Yamaguchi, A. and Shigematsu, N., 2014, Stress reversal recorded in calcite vein cuttings from the Nankai accretionary prism, southwest Japan. *Earth Planets Space*, **66**: 144, doi: 10.1186/s40623-014-0144-4. [ページ番号では特定できない論文.]
- Walter, L. M., Bischof, S. A., Patterson, W. P. and Lyons, T. L., 1993, Dissolution and recrystallization in modern shelf carbonates: Evidence from pore water and solid phase chemistry. *Phil. Trans. Roy. Soc. London*, **A344**, 27–36. [同じ誌名だが A, B, C, … でシリーズが区別される場合.]
- *English translation from the original written in Japanese
2. 書籍
海外の出版社はその所在地も記述する。
- Ilyushin, A. A., 1990, *Mekhanika Sploshnoi Sredy*. Moscow Univ. Press, Moscow, 310p., ISBN: 5211009401 (in Russian). [非ローマ字言語のタイトルをローマ字で表示した例. ISBN を付して書籍を特定できるようにする.]
- 活断層研究会編 (The Research Group for Active Faults, ed.), 1991, 新編日本の活断層: 分布図と資料 (*Active Faults in Japan, New Edition: Distribution Map and the Related Materials*)*. 東京大学出版会 (Univ. Tokyo Press), 363p.
- 日本の地質 [北海道地方] 編集委員会編 (Editorial Committee of Hokkaido, Regional Geology of Japan, ed.), 1990, 日本の地質 1 [北海道地方] (*Regional Geology of Japan, Vol. 1, Hokkaido*)*. 共立出版 (Kyoritsu Shuppan), 337p.
- 小川琢治 (Ogawa, T.), 1944, 日本群島 (*The Japanese Archipelago*)*. 弘文堂 (Kobundo Press), 372p.
- Reading, H. G., ed., 1986, *Sedimentary Environments and Facies, 2nd ed.* Blackwell, Oxford, 615p.
- Sadovsky, M. A., Bolkhovitinov, L. G. and Pisarenko, V. F., 1987, *Deformation of a Geophysical Medium and the Seismic Process*. Nauka, Moscow, 100p. (in Russian). [原題がローマ字を使わない日本語以外の言語の場合.]
- セドフ, 大橋義夫訳 (Sedov, L. I., translated by Ohashi, Y.), 1977, 連続体力学 (*Foundations of the Non-Linear Mechanics of Continua*). 培風館 (Baifukan), 248p. [原題がローマ字を使わない外国語で, 英語タイトルがわかる場合.]
- Weaver, C. E., 1989, *Clays, Muds and Shales*. Developments in Sedimentology, **44**, Elsevier, Amsterdam, 819p.
- ウェーゲナー, 都城秋穂・紫藤文子訳 (Wegener, A., translated by Miyashiro, A. and Shidou, F.), 1981, 大陸と海洋の起源 (上) 大陸移動説 (*Die Entstehung der Kontinente und Ozeane*). 岩波書店 (Iwanami Shoten), 244p. [非英語でもローマ字を用いる言語の場合.]
3. 論文集や書籍の一部など
- Cosgrove, J. W., 2015, The association of folds and fractures and the link between folding, fracturing and fluid flow during the evolution of a fold-thrust belt: a brief review. In Richards, F. L., Richardson, N. J., Ripplington, S. J., Wilson, R. W. and Bond, C. E., eds., *Industrial Structural Geology: Principles, Techniques and Integration*, Geol. Soc. London, Spec. Publ., **421**, 41–68.
- 藤原 治 (Fujiwara, O.), 2001, 第四紀構造盆地の沈降量図 (Subsidence map of Quaternary tectonic basins)*. 小池一之・町田 洋編, 日本の海成段丘アトラス (*Atlas of Quaternary Marine Terraces in the Japanese Islands*), 東京大学出版会 (Univ. Tokyo Press), 85–96.
- Karsakov, L. P., 1983, Metamorphic assemblages of Priamurie. In Neelov, A. N., ed., *Precambrian Metamorphism of the Baikal-Amur Railway Area*, Nauka, Leningrad, 66–97 (in Russian).
- Matsumoto, T. 1940, On the Urakawa Transgression in Japan. *Jubilee Publication in the Commemoration of Prof. H. Yabe's 60th Birthday*, **2**, 743–749.
- Keller, G., 1992, Paleoeologic response of Tethyan benthic foraminifera to the Cretaceous-Tertiary transition. In Takayanagi, Y. and Saito, T., eds., *Studies in Benthic Foraminifera*, Tokai Univ. Press, 77–91.
- 前島 渉 (Maejima, W.), 2009, 外帯の浅海成白亜系, 紀伊半島地域 (Shallow marine Cretaceous Systems in the Kii Peninsula). 日本地質学会編, 日本地方地質誌 5, 近畿地方 (*Regional Geology of Japan, Vol. 5, Kinki Region*)*, 朝倉書店 (Asakura Publ.), 164–169.
- Mitchum, Jr., R. M., 1977, Seismic stratigraphy and global changes of sea level, part II: Glossary of terms used in seismic stratigraphy. In Payton, C. E., ed., *Seismic Stratig-*

raphy: Applications to Hydrocarbon Exploration, Mem. Am. Assoc. Petrol. Geol., 26, 205–212.

4. 講演要旨

Bova, S. C., Herbert, T. and Fox-Kemper, B., 2015, Holocene deep ocean variability detected with individual benthic foraminifera. *Am. Geophys. Union Fall Meet.*, PP43B-2268.

Caines, R. R. and Droser, M. L., 2001, A Middle Cambrian oxygen-deficient biofacies: Great Basin, USA. *Geol. Soc. Am. Annu. Meet. Abstr.*, 177-0. [Annu. はAnnual の略. Ann. はAnnales, Annali, Annalen の略.]

久田健一郎・忽滑谷優里・折橋裕二・小室光世(Hisada, K., Nukariya, Y., Orihashi, Y. and Komuro, K.), 2010, 牟婁層群 quartzite 礫の碎屑性ジルコン U-Pb 年代測定と供給源(U-Pb dating of detrital zircons in the quartzite clasts and their provenance). 日本地球惑星科学連合 2010 年大会予稿集 (*Japan Geosci. Union Meet. 2010, Abstr.*), SGL046-03.

星 博幸(Hoshi, H.), 2009, 西南日本の時計回り回転:到達点と課題. 日本地質学会第 116 年学術大会講演要旨(116th Annu. Meet. *Geol. Soc. Japan, Abstr.*), 11.

Rosenberg, C. and Garcia, S., 2013, Topography of the Central Alps in the light of Tertiary collisional tectonics. *EGU Gen. Assembly*, EGU2013-9905.

5. 巡検案内書

Barton, C. C. and Hsieh, P. A., 1989, Physical and hydrologic flow properties of fractures. *28th International Geological Congress, Field Trip Guidebook T385*, Am. Geophys. Union, Washington D. C., 36p.

Choi, Y. S. and Ryang, W. H., 2001, Evolution and sedimentation of Cretaceous Eumseong (Eumsung) Basin, Korea. In Choi, Y. S., Ryang, W. H., Kim, B. C. and Lee, B.-J., eds., *Cretaceous Basins: Eumseog and Gongju Basins, The Third Joint Meeting of Japanese and Korean Structure and Tectonic Research Groups*, 3–42.

永広昌之・山北 聡・高橋 聡・鈴木紀毅(Ehiro, M., Yamakita, S., Takahashi, S. and Suzuki, N.), 2008, 安家-久慈地域の北部北上帯ジュラ紀付加体(Jurassic accretionary complexes of the North Kitakami Belt in the Akka-Kuji area, Northeast Japan). 地質雑(*Jour. Geol. Soc. Japan*), 114, S121–S139. [本誌の補遺または通常号に年会の巡検案内が載っている場合.]

永尾隆志・半田正敏(Nagao, T. and Handa, M.), 1985, 萩市笠山周辺の新生代火山岩類(Cenozoic volcanic rocks around Kasayama, Hagi City). 日本地質学会第 92 年大会見学旅行案内書(92nd Annu. Meet. *Geol. Soc. Japan, Excursion Guide book*), 119–136. [年会の巡検案内が本誌から独立した冊子体だった時代のもの.]

6. 地質図

Bayley, R. W. and Muehlbecker, W. R., 1968, *Basement Rock Map of the United States, Exclusive of Alaska and Hawaii*. U. S. Geol. Surv., scale 1: 2,500,000, 2 sheets.

石田志朗・井本伸広・武蔵野 実(Ishida, S., Imoto, N. and

Musashino, M.), 1981, 京都西北部(5 万分の 1 表層地質図)(*Subsurface Geological Map, Koto-Seihokubu*), 京都府(Kyoto Prefecture).

斎藤 眞・沢田順弘(Saito, M. and Sawada, Y.), 2000, 横山地域の地質. 地域地質研究報告(5 万分の 1 地質図幅)(*Geology of the Yokoyama District. With Geological Sheet Map at 1: 50,000*), 地質調査所(Geol. Surv. Japan), 126p.

東京都土木技術研究所(Civil Engineering Center of Tokyo Metropolitan Government), 1977, 東京都総合地盤図(*Underground Geological Map of Tokyo Metropolitan Area, I*), 技報堂(Gihodo).

脇田浩二・宮崎一博・利光誠一・横山俊治・中川昌治(Wakita, K., Miyazaki, K., Toshimitsu, S., Yokoyama, S. and Nakagawa, M.), 2007, 伊野地域の地質. 地域地質研究報告(5 万分の 1 地質図幅)(*Geology of the Ino District, Quadrangle Series, 1: 50,000*), 産総研地質調査総合センター(Geol. Surv. Japan, AIST), 140p.

山口県(Yamaguchi Prefecture), 1968, 5 万分の 1 山口県地質図および同説明書(*Geological Map of Yamaguchi Prefecture, Scale 1: 50,000 and Its Explanatory Text*)*, 山口県(Yamaguchi Prefecture), 33p.

7. 電子書籍やCD等電子媒体による出版物

同じ内容の冊子体が出版されているなら, 冊子体の書式で記述する.

Izawa, E., Urashima, Y., 2001. Quaternary gold mineralization and its geologic environments in Kyushu, Japan. In Feebrey, C. A., Hayashi, T. and Taguchi, S. eds., *Epithermal Gold Mineralization and Modern Analogues, Kyushu Japan*, SEG Guidebook Series(CD-ROM), 34, 1–9.

Suzy, D. R., 2016, *ABC Geology: A book for the Littlest Scientists*. Glass Beaker Publ., Kindle Edition, ASIN: B01LTA-6J0Y.

吉田 勝・天野一男・中井 均(Yoshida, M., Amano, K. and Nakai, H.), 2013, 地学を楽しく!: ジオパーク・ジオツアー・地学オリンピック(*Enjoy Earth Science! Geotour, Geopark and Earth Science Olympiad*)*. 日本地質学会(Geol. Soc. Japan), PDF Edition, ISBN: 978-4-907604-00-4.

8. 学位論文

Etchecopar, A., 1984, *Etude des États de Contrainte en Tectonique Cassante et Simulations de Déformations Plastiques: Approche Mathématique*. Ph.D. Thesis, Univ. Montpellier, 270p. (in French).

Ueno, T., 2004, *Eruption Mechanisms of Large-Scale Pyroclastic Flow: A Case Study of Aira Pyroclastic Eruption*. Ph.D. Thesis, Kobe Univ., 163p.

附則 ・本規則の変更は, 理事会の承認を得る.

・本細則は, 2011 年 6 月 1 日から施行する.

2011 年 7 月 16 日一部改正

2014 年 9 月 12 日一部改正

2016 年 12 月 3 日一部改正

細則 5

講座に関する細則

1. 講座には、連載を通じて一つの表題を付け、各回のテーマを副題として付ける。例えば、
下部地殻：第1回、序論
といった具合である。第1回では、講座の全体構想に関する解説と、連載に関して単行本の目次に相当する予定表を含める。
2. 地質学雑誌において1つの講座の連載回数は、最小で3号分以上とし、原則として最大で12号分とする。連載とはいえ、連続した号に掲載するとは限らず、講座の各回の掲載号は、編集委員会が決定する。また、第1回で講座の趣旨説明と連載計画のみを掲げ、実質的内容を第2回から始める場合に限り、第1回と第2回を同じ号に掲載できるものとする。
3. 講座の執筆者は、連載を通じて1名でもよく、また複数名でもよい。さらにまた、各回を別の者（複数でも可）が執筆できるものとする（以下、リレー形式の講座とする）。第1著者が回によって交代するなら、リレー形式と見なす。執筆者が複数の場合は、執筆陣は講座を通じた筆頭著者を決め代表者とする。連載を通じて執筆者が1名の場合も、以下では、その執筆者を代表者と書く。代表者は地質学会会員でなければならない。
4. 講座を掲載するために、代表者は電子メールにより、「講座申込書」を地質学雑誌編集委員会に提出する。またその際、連載の最初の3回分の原稿を編集委員会に提出するものとする。同委員会は随時申し込みを受け付ける。同申込書と最初の3回分の原稿により、同委員会は申し込みを受諾するか否かを決定する。
5. 編集委員会では原稿が投稿された段階で、担当の編集委員や査読者を決める。リレー形式の講座の場合は、執筆陣のなかから客員編集委員を任命することができる。客員編集委員自身が執筆する回は、別に担当編集委員を任命する。客員編集委員の

- 任期は、当該講座の掲載が終了するまでとする。
6. 個々の原稿の査読は、著者が会員・非会員であるかを問わず、原則として通常の論文の場合と同様に行う。査読者には、論文の原稿とともに「講座申込書」を添付し、講座の構成原稿であることと連載の全体計画についてわかるようにする。原稿の査読は連載の順番にしたがって、1回分ごと順次に行う。
 7. 編集委員会は講座を構成する原稿を掲載不可とすることができる。掲載不可と判断されたならば、そのことをその回の原稿の執筆者および代表者に連絡する。また、編集委員会の判断により、途中で連載を打ち切ることがある。
 8. 連載が進むにつれ、当初の執筆計画に変更の必要が生じた場合、ないし掲載不可とされた回があった場合などは、代表者は「講座申込書」を修正して編集委員会に再提出するものとする。
 9. 編集委員会独自の判断で、講座を企画・立案することができる。
 10. なお上記手順については、必要に応じて修正を行うものとする。

注1：「講座申込書」には最低限以下の項目について記述するものとする。

- 1) 講座のタイトル
- 2) 代表者氏名（連載を通じて執筆者が1名の場合はその者の氏名）
- 3) 代表者の連絡先（所属先、電話、FAX、e-mail等）
- 4) 講座の趣旨（意義・目的）
- 5) 講座の目次（各回のタイトル・著者名・見込みページ数）

附則 ・本規則の変更は、理事会の承認を得る。
・本細則は、2014年4月5日から施行する。
2014年9月12日一部改正
2016年12月3日一部改正

細則 6

数式の書き方に関する細則

1. 数式を書くときには、論文の数式以外のところと同様に、誤解の余地のないようにすることが重要である。また、シンボルと活字の選択が慣例にそって書かれた数式は読みやすく、理解しやすい。数式を原稿に含めるにあたっては、本文のみならず図表中の数式についても、本ガイドラインにそって原稿を作成するものとする。
2. 数式には、半角文字のローマ字、ギリシャ文字、その他の記号（例えば \times ）を用い、立体または斜体を下の表のように使い分けること。ただしここで斜体とは、イタリック体（例、 i ）とオブリーク体（例、 i ）の両方を指す。原稿作成段階では、イタリック体とオブリーク体のどちらを使ってもよい。斜体にした文字を印刷時には、ローマ字ならイタリック体で、ギリシャ文字はオブリーク体で組み版する。

例	使用するフォント	指示対象
Ar, km, +, =	Times系, 立体	元素記号, 単位, 演算子, 数, 数値
$A, a, \varepsilon, \sigma$	Times系またはSymbol系, 斜体	スカラー量, 変数
$\mathbf{A}, \mathbf{a}, \boldsymbol{\varepsilon}, \boldsymbol{\sigma}$	Times系またはSymbol系, 斜体, 太字	ベクトル量, テンソル量, 行列

補足説明

- (a) 小文字 l の斜体は l であるが、 ℓ としたい理由がある場合は、編集委員会にその旨、申し出ること。
- (b) 国際単位系の接頭辞としての k （キロ）は立体である。また、単位の接頭辞としての μ （マイクロ）も立体であり、 μm のように書くこと。変数の場合は、斜体 μ である。

- (e) 横棒には、ハイフン「-」、半角ダッシュ「-」、全角ダッシュ「—」、負号「-」、音引き「-」というように似た記号があるが、負号には負号の文字を使うこと。
- (d) 乗算記号にローマ字の X や x を使ってはならない。原稿作成時には、Times 系または Symbol 系の半角フォントの × を使うこと。
- (e) 微分演算子は d/dx のように立体にする。積分の場合も同様である： $\int f(x) dx$ 。剰余を表す mod も演算子なので、 $k = n \bmod 2$ のように立体とする。角括弧を演算子の意味で使う場合には、大小関係を表す記号を使った $\langle a, b \rangle$ ではなく、 $\langle a, b \rangle$ のように、記号〈および〉を使うこと。
- (f) 省略記号は、何を省略するかに応じて、 $a_1 + a_2 + \dots + a_n$ と a_1, a_2, \dots, a_n のように打点の高さを変えること。
- (g) 概数を英文では $\sim 2 \text{ km}$ のように波ダッシュで表現する。近似式は $A \sim 2 \text{ km}$ ではなく、 $A \approx 2 \text{ km}$ である。波ダッシュは、和文中では $2\sim 3 \text{ km}$ のように範囲を表す場合と用法が重複するので、「約 2 km」のように書くこと。近似式は、 \approx または \cong を使って、 $A \cong 2 \text{ km}$ のように書く。
- (h) 関数は、log, sin, exp, grad のように、立体で書くこと。
- (i) 番号は斜体とする。例えば、 $\sigma_{ij}, x_i, x_{i+1}$ という場合の i, j である。最後の例の + は演算子であるため、また、1 は数であるため立体になっている。
- (j) 座標は x 軸、 x -axis のように斜体とする。
- (k) レイノルズ数やフルード数のように、シンボルが定着している無次元量は立体とする。また、2 文字目を添え字にしない。例えば、それらは Re および Fr のように書く。
- (l) 自然対数の底および虚数単位は、 $e^x, a + bi$ のように、立体とする。
- (m) 物理量を表す添え字は、斜体とする。例えば、 P_x という具合である。
- (n) 添え字が言葉の意味を表す場合には、立体とする。例えば、泥岩の密度、最大水平応力を、 $\rho_{\text{ms}}, \sigma_{\text{Hmax}}$ のように書く。行列の転置も同様で、 A^T の添え字 T は立体とする。
- (o) ある量とそれと似た量を a と a' のように区別する場合、後者にはアポストロフィ「'」ではなく、プライム「'」を使うこと。
3. 物理量や変数・定数を表すシンボルは、慣例にしたがって選ぶこと。例えば、密度は ρ 、重力加速度は g または g とする、というような選択である。あるカテゴリーの量が条件によって変化する場合には、条件ごとにシンボルを変えることは、避けるべきである。例えば、圧密その他で密度が変化したり、岩質による違いで様々な密度が現れる場合も、 ρ とあわせて R や r のような他の文字を使うより、 $\rho', \bar{\rho}, \rho_w, \rho_z$ のように、密度には一貫して ρ の文字を与え、添え字やアクセント記号でそれらを区別した方がよい。
4. 数式だけで 1 行を占める別行立て (display style) の数式でも、それが文末に位置するならば、ピリオドを付ける。例えば、次のような場合である：

$$S = \pi r^2.$$

5. 別行立てとそうではない (インライン形式) 場合とでは、総和記号の書き方が異なる。別行立てでは、

$$\sum_{i=1}^N$$

であるが、インライン形式では $\Sigma_{i=1}^N$ のように、和をとる範囲を添え字で表現する。同様の差異がある記号には、他に lim や max などがある。インライン形式のときに、行間を乱さないためである。したがって、正方行列のように高さが行間隔より大きいものは、別行立てにすべきである。ただし列ベクトルは、転置して $(1,0,0,0)^T$ のようにする。分数は特別の意図がない限りは、 $\frac{1}{2}$ とはせず、1/2 のように斜線で表現すること。

6. 英文では数値と単位のあいだにスペースを挟む (例、100 km)。和文の場合は、スペースを挟んでも挟まなくともよいが、1 つの論文の中ではどちらかに統一すること。また、斜体と立体が隣接するときは、適宜狭いスペースを挟んで、文字が重複しないようにする。例えば、 $f \log y$ ではなく $f \log y$ とする、という具合である。正負の符号の前後に狭いスペースを挟むか否かは、文脈による。 $a + b$ や $a - b$ のように、二項演算子として使われる場合は、符号の前後に短いスペースを挟む。数値の正負を表すとき、すなわち単項演算子のときには、 $+b, -b, -0.1$ のように、直後の文字とのあいだにスペースを挟まない。複合土、 \mp も同様の扱いとする。等号と不等号の前後には、スペースを挟む。例えば、

$$H(x) = \begin{cases} 0 & x < 0 \\ 1/2 & x = 0 \\ 1 & x > 0. \end{cases}$$

したがって、 $A + B = C$ を $A+B=C$ などとしてはならない。

7. 多重添え字 (例、 a^{bc}) は、誤解のおそれがない場合に限りて使用し、そのおそれがある場合は括弧で累乗の順序を明確にすること。例えば、 a^{bc} は a^{b^c} と紛らわしいので、 $(a^b)^c$ と書くこと。プライムや星印も同様で、 a', a^* の二乗は、 a'^2 や a^{*2} ではなく、 $(a')^2$ および $(a^*)^2$ とすべきである。同様に、転置行列の二乗は、 A^{T^2} や A^{T2} ではなく、 $(A^T)^2$ と書くこと。指数関数は、 $e^{\cos(\theta + \theta_0)}$ のように複雑なものは、exp を使って $\exp[\cos(\theta + \theta_0)]$ のように書くこと。
8. 適宜、括弧を使って、曖昧さが残らないようにすること。曖昧になりやすい例として、分数の分母を 1 行に書く場合が挙げられる。一般に、 $1/abcde$ のように書けば、斜線の後すべてが分母であり、 $(1/a) \times bcde$ の意味には取られない。したがって、例えば、 $\frac{1}{2} \cos \theta$ の意味で $1/2 \cos \theta$ と書いてはならない。乗算記号を使って $1/2 \cdot \cos \theta$ あるいは $1/2 \times \cos \theta$ としても、曖昧さが残る。乗法と加法の場合と違って、乗法と除法では実行順序において同じ優先度を持つためである。別行立ての式においても、分数の分母または分子を 1 行に納めようとするときに、同様に注意が必要である。例えば、次の場合である：

$$\frac{E}{(\cos \theta)/2}$$

計算順序が曖昧なものとして、他に

$$\cos P \frac{\partial y}{\partial x}$$

のような例がある。この書き方では、 $\cos(P \partial y / \partial x)$ であるか、

$(\partial y/\partial x) \cos P$ であるか曖昧である。また、 $(n+1)$ 次元、英文の場合 $(n+1)$ -dimensional という場面では、括弧が必要である。

9. 大括弧、中括弧、小括弧を入れ子にする場合、初等中等教育では $\{[()]\}$ という順序にするように教えられるが、英文では $\{[()]\}$ の順にするのが普通である。投稿原稿が英文なら後者にすること。和文ではどちらでもよいが、1つの原稿中ではどちらかに統一すること。
10. 地質学雑誌は2段組みで印刷される。印刷されたときに1段の幅に収まらない長さの数式は、下の例のように複数行に分けること。印刷されたときのことを原稿執筆時に予想することが重要である。例えば、次の式は1行には収まらないので、途中で改行する：

$$\begin{aligned} \frac{\partial \xi}{\partial r} \tan \left(\theta + \phi + \frac{\pi}{4} \right) \\ = \frac{\rho g}{2c_Y} + \frac{\cos \theta}{\sqrt{2} \cos \left(\theta + \phi + \frac{\pi}{4} \right)} + C. \end{aligned} \quad (1)$$

この例のように、2行目以降を字下げする。3行以上の場合

$$\begin{aligned} x = & a + b + c + d + e + f + g + h + i + j \\ & + k + l + m + n + o + p + q + r + s \\ & + t + u + v + w + x + y + z \end{aligned}$$

のようにする。ちなみにこの例で、 k と t の直前の+は正符号ではなく2項演算子なので、+の後にスペースが置かれている。改行する場合は第(1)式のように、等号、加法、減法のところで改行することを基本とする。項の途中で改行するときには、掛け算の記号 \times を付ける。例えば、

$$\begin{aligned} \eta_0 = & \left[2(B^*)^{\frac{1}{n}} D \left(1 - \frac{1}{n} \right) \right]^{-1} \\ & \times \exp \left(\frac{Q}{nRT_0} \right) \end{aligned}$$

という具合である。行列の途中で改行することは避けるべ

きだが、その必要があるときには、次のように書く：

$$\begin{pmatrix} k & \ell & fk \\ -k & 1-\ell & gk \\ -k-Rk & 1-\ell-R\ell & Efk \\ k & \ell & -Egk \end{pmatrix} \begin{pmatrix} -g\ell \\ -g+f\ell \\ -Ef+Eg\ell \\ -Ef\ell \end{pmatrix} \begin{pmatrix} a^{(1)} \\ b^{(1)} \\ c^{(1)} \\ d^{(1)} \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 0 \\ 0 \\ 0 \\ 0 \end{pmatrix}$$

式自体を変更して改行せずに済むようにすることも、一つの対処法である。例えば、 $\psi = \theta + \phi + \pi/4$ というシンボル ψ を定義しておくことにより、第(1)式を

$$\frac{\partial \xi}{\partial r} \tan \psi = \frac{\rho g}{2c_Y} + \frac{\cos \theta}{\sqrt{2} \cos \psi} + C$$

のように短くすることができる。分子が長い式である場合は、

$$\begin{aligned} f(x) = & \frac{1}{3x^2 + 3x + 1} [(Ax^3 + Bx^2 + C + D) \cos ax \\ & + (Ex^3 + Fx^2 + G + H) \sin ax \\ & + (Ix^3 + Jx^2 + K + L) e^x] \end{aligned}$$

のように改行する。分母が長い式である場合は、

$$\begin{aligned} f(x) = & [(Ax^3 + Bx^2 + C + D) \cos ax \\ & + (Ex^3 + Fx^2 + G + H) \sin ax]^{-1} \end{aligned}$$

のように分母の部分を括弧でくくって-1乗するか、または、

$$f(x) = 1/A, \text{ ただし}$$

$$\begin{aligned} A = & (Ax^3 + Bx^2 + C + D) \cos ax \\ & + (Ex^3 + Fx^2 + G + H) \sin ax \end{aligned}$$

という具合に、分母を独立した式として提示する。

- 附則 ・ 本規則の変更は、理事会の承認を得る。
 ・ 本細則は、2011年6月1日から施行する
 2014年9月12日一部改正